

授業改善書

| | |
|-----|-------|
| 科目名 | 情報科学史 |
| 担当者 | 伊藤 裕二 |

授業の概要

授業では、現在身の回りにある情報科学・技術及び近い将来主流となり得るものを中心にその歴史的背景としくみについて講義した。また、理解度を深めるためにマルチメディア分野の体験学習としてフォトタッチ(ホームページ制作、初級プログラミング、フォトタッチから学生が選択)を実施した。

授業の問題点

本年度は授業内容、授業方法、授業全体に関して平均評価点 4.0 ポイント程度の比較的高いレベルを維持できた。しかし、昨年度の平均評価点 4.4 ポイントを大きく下回る結果となり、特に評価が低かった項目について早急に対策が必要である。問題点として以下2点を採り上げる。

1) 学習態度の「質問や発言をしましたか」の点数が昨年度同様 2.61 と低かった。実際、自発的に質問する学生は例年数名いたが今年度は皆無であった。また、評価が大きく下がった「授業内容への関心」(評価 3.57)、「説明の分かり易さ」(評価 3.65)との関連性もあり、総合的に考察する必要がある。

2) 講義最後段において現代及び近未来の情報科学技術の動向について解説している。日進月歩の分野であるためシラバスで選定したトピックよりもインパクトの大きなものが話題になることがあり、講義内容の陳腐化が懸念される。

学習態度の「ノートを取りましたか」の点数が 2.87 と低かった。この点に関しては、ノートを取ることも考えることを重視してスライドを含め講義資料は講義後に講義専用 Web サイト上で履修生に開示しているので大きな問題にはならないと考える。

学生の授業満足度

「授業で得るものがあつたか」「授業に満足できたか」の質問に対して学生から平均 3.7 ポイントと中間的な評価を得た。しかし、昨年度の平均評価点 4.4 ポイントを大きく下回る結果となった。要因を精査し、次年度以降改善に努める。

授業改善の課題と方策

上欄授業の問題点に対する授業改善策を以下のように考える。

1) 一連の現象を[講義内容が分からない→関心がなくなる→質問・発言しない]という連鎖の結果であると仮定し(仮説設定)、講義を分かり易くする対策を講じる。次年度は、受講者の情報科学技術に関する受講前知識想定レベルをより低く設定する。具体的には平易な言葉で説明し、専門用語については学生の理解度を確認しながら講義を進める。

2) 現代及び近未来の情報科学技術の解説では新規性を有しよりインパクトのある技術を取り上げる必要があると考える。そのため常に最新動向を調査し、必要に応じてトピックを入れ替えてシラバスを更新する。本年度は仮想通貨(暗号資産)の台帳管理方式として用いられているブロックチェーンの話題を追加した。

その他

年々出席率の二極化が顕著になってきている。特に本年度は出席回数不足の理由で期末試験を受験できなかった学生が初めて 30%を超えた(48人中 15人)。シラバス情報開示により受講ミスマッチを防止するとともに次年度は講義開始・導入時期の雰囲気づくりに努める。